ねがい ひろがる 教育実践

神戸大学
川地亜弥子

かわじ　あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？―発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

第６回　子育て・療育・発達相談
～それぞれに子どもの輝く姿をとらえて

保育や療育の日常の場面でのふとした気づきと、日常とはちがう発達検査・相談場面で明らかになることと、その両方をうまく活かしながら、実践を進めていくにはどうしたらよいのか…。子どもの姿や、検査の結果から、否定的に子どもの発達を理解するのではなく、子どものねがいを読みとき、もっと広げていくにはどうしたらよいのでしょうか。

発達相談と療育実践について、大阪府寝屋川市の療育施設「あかつき・ひばり園」の安藤史郎さんのとりくみを通じて考えます。安藤さんは、園で保育士として担任する年度もあれば、発達相談員として子どもたちに関わる年もありました。

療育は一人でするものではありません。担任同士でさまざまな悩みを共有し、そのなかで何度もの「もしかしたら」「きっとそうかも」「本当にそうだった！」を繰り返していきます。発達検査の結果や相談の内容をうけて、どう考えるかもそうです。あかつき・ひばり園でのそうたくんの変化を通じて、専門家と保護者が協力しあい、療育をつくり発達相談をよりよいものにしていくとはどういうことかについて、考えてみます。

おとながらの関わりっていいもんだな

そうたくんをパンダクラスで担任した時のこと。そうたくんはそれまでの2年間の療育のなかで、○○したい、という気持ちと、いやだ、という気持ちの両方がふくらんできた一方、言葉でうまく伝えることはできませんでした。保護者も、そうたくんが何をしたいのかがわかりませんでした。そうたくんにも思いはあるのに…というもどかしい時期でした。

そうたくんは、みんなが遊んでいる時には部屋のすみっこにいることが多く、自由遊びの時にはホールを走り回っていました。人に関わられることが苦手で、特に男性職員は苦手でした。近寄るだけで声をあげて逃げていたそうです。安藤さんは、そうたくんの感じている世界を一緒に味わうようにしました。

クラスの目標は「子どもたちそれぞれの手応えを大事にして、わくわくをふくらませ、要求の主人公に」。一年を通じて虫や植物を育て、おとなに準備してもらうばかりではない生活にしようと、テーマを「命を育み、自分たちで生活をつくろう」としました。

4月のそうたくん。ほかの子が好きな高い高いなどの遊びも、「ふあー！」と逃げていきます。その一方、自分から食べないみそ汁も食べさせると食べる、嫌いな歯科の部屋に泣きながらでもお母さんについていく、などの姿がありました。安藤さんたちは、おとなに誘われると、いやでもやってしまうのでは、と気づき、そのままでは「おとながらの関わりっていいもんだな」という安心感がもてないのではないか、と考えました。誘いに乗ってくれることは大人にとって「助かる」ことが多いものですが、その関係だけではそうたくんに安心感が育たないのではないか、と考えたのです。

ある日、ほかの子に飛行機遊び（寝転んで子どもを足の上に乗せる遊び）をしていると、いつもは部屋のすみにいるそうたくんが近寄ってきました。たまたまかな…いや、明らかに近づいてきているな、気になるのかな、と考え、寝転んだまま手を広げて「おいで」と言うとやってきます！　バランスをとってそーっと持ち上げると、うれしそう！　でも、もう一度するのは嫌だったようです。くり返しにはならなくても、友だちを見てやりたい思いをもったのではないか、短い単位で遊びを共有できるのではないか、おとなが寝た姿勢だと近寄りやすいのかも、とさまざまな気づきを安藤さんは得ます。

その後も、ちらりとしか見ていなくても、好きなメニューの時には座り、そうでない時にはすみっこにいるなどのそうたくんの意思表示に、担任の先生たちは気づいていきました。おとなの「してほしい」気持ちをぐっとおさえ、そうたくんの「やりたいな」「やろうかな」の瞬間を見逃さないようにしてさりげなく手伝い、「やりたい」から「できた」へとつなげていくことを大事にしました。

日曜参観の懇談会で、お父さんに「子どものかわいいと思うところは？」と尋ねたところ、「『うん』の意味で『バボ』と言うんですよ」とうれしそうに話してくださいました。この一言をきっかけに、そうたくんの発語の意味がわかるようになっていきました。大好きなアンパンマンの言葉や遊びをきっかけにして、くすぐり遊びもおとながらの関わりを期待して待って楽しむようになりました。

好きなものを求めている！

その一方、紙を器用にビリビリとし、